

Title	アガンベンにおけるバンヴェニスト (2) : 言表行為
Sub Title	Benveniste chez Agamben (2) : Énonciation アガンベンにおけるバンヴェニスト (2) : 言表行為
Author	高桑, 和巳(Takakuwa, Kazumi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.71 (2020. 10) ,p.163- 183
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20201031-0163">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20201031-0163</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# アガンベンにおけるバンヴェニスト (2)

## ——<sup>エノンシアシオン</sup>言表行為——

高 桑 和 巳

### 0. はじめに

本稿では、ジョルジョ・アガンベンの仕事全体（最初期から現在に至るまで）において言語学者エミール・バンヴェニストの業績がどのように参照されているかを確認する作業を継続する<sup>1)</sup>。

今回は主として<sup>エノンシアシオン</sup>言表行為論を扱う。前回と今回で扱えなかったテーマはすべて次回（最終回）に扱う予定である。強いて言えば、本稿は前回と次回をつなぐ程度の役割しか担っていない。今回は、内容的にも平板な——とはいえ、網羅の作業を進めるうえで不可欠ではある——事項確認をするにとどめる。

前回の作業を通じて、いくつかの確認がなされた。バンヴェニストの著作とアガンベンとの最初の出会いは1970年前後に遡り、はじめての言及は1975年になされること。初期には、語彙論およびその周辺への論及は（皆無ではないが）稀であり、セミオティック／セマンティック論が（言表行為論にわずかに先行して）中心的に取りあげられること。その言及は『スタンツェ』（1977年）において、セミオティック／セマンティック間の埋められ

---

1) 本稿は、以下に続くものとして書かれている。高桑和巳「アガンベンにおけるバンヴェニスト (1) セミオティック／セマンティック」、『日吉紀要 人文科学』第35号（慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会、2020年6月）195-220頁。

ない「割れ目」の強調をともなって開始されること。このバンヴェニストの貢献が、『スタンツェ』で提起される「スフィンクスのなもの」（「オイディプスのなもの」と対比されている）に属するものとして評価されていること。『散文のアイデア』（1985年）所収の「名のアイデア」は（バンヴェニストへの言及をいっさい含まないが）セミオティック／セマンティック論への暗黙の参照としてのみ含蓄を読み取れること。セミオティック／セマンティック論の評価のしかたには『スタンツェ』以降、現在に至るまで、基本的に揺らぎがないこと——ざっと以上が、前稿で確認できたことである。

さて、セミオティック／セマンティックをめぐる言及は、前稿において基本的に網羅されたと信ずる。しかし、「言語<sup>ラング</sup>の記号学」（セミオティック／セマンティックが集中的に論じられている当のテキスト）の他の箇所への言及は、これ以外にも見あたる。

たとえば、『アウシュヴィッツの残るもの』（1998年）の第4部「アルシーヴと証言」の冒頭で、「言語<sup>ラング</sup>の記号学」末尾に書きつけられた今後の展望が引かれている。要するに、セミオティック／セマンティックの問題設定の先では、おそらくは言表行為論にもとづいた探求が十全に展開されるはずだった（が、バンヴェニストの失語症発症によってその展開が途絶した）ということである。

1969年のある晩、パリで、コレージュ・ド・フランス教授エミール・バンヴェニストは路上で急病に襲われた。身元証明書を所持していなかったため、身元が確認されなかった。身元が判明したときには彼は全面的かつ不治の失語症に罹っており、1972年の死去まで、もはやまったく仕事ができなかった。同年、デン・ハーグで出版された『セミオティカ』誌に「言語<sup>ラング</sup>の記号学」が発表された。その末尾で彼は、ソシユール言語学を超えた先でなされる探求のプログラムを描いているが、その探求は未決のままとなってしまった。このプログラムの基礎に、もしかするとバンヴェニストの最も天才的な創造物であるかもしれない、あの言表行為論があるとしても驚きではない。彼は次のように確言して

いる。ソシール言語学の乗り越えは二つの道でなされるだろう。第一の道は——こちらは完璧に理解可能である——、記号のパラダイムにもとづいた意味の理論とは判明に区別される言説の意味論ディスクール セマンティックという道であり、それに対して第二の道は——私たちの関心を引くのはこちらの道である——、「言表行為の意味論セマンティックにもとづいて構築されるメタ意味論セマンティックを作りあげることによって、テキストや作品をトランス超言語学的に分析すること」に存するだろう<sup>2)</sup>。

これに次いで、言表行為論がそのつどの言表行為の生起に向かう以上、その意味論セマンティックとはいったい何なのか、つまり「この観点からすると、言表行為の意味論セマンティックにもとづくメタ意味論セマンティックとは何を意味しうるのか？ 失語症に落ちこんで行く前に、バンヴェニストは何を垣間見たのか？<sup>3)</sup>」と問いが立てられる。

この一節には、「一考古学の考古学」(2004年)でも同一の観点から触れられている。「[言語の記号学]ラング」の末尾で、バンヴェニストはソシール言語学のありうべき乗り越えをほのめかしている。それは、「言表行為の意味論セマンティックにもとづいて構築されるメタ意味論セマンティックを作りあげることによって、テキストや作品をトランス超言語学的に分析すること」に存するとされている<sup>4)</sup>。

## 1. 言表行為、代名詞（「中期」）

というわけで、アガンベンが参照する、一般言語学に関するバンヴェニストの貢献として、次に挙げるべきは言表行為論・代名詞論だということにな

2) Giorgio Agamben, *Quel che resta di Auschwitz: L'archivio e il testimone* (*Homo sacer*, 3) (Torino: Bollati Boringhieri, 1998), p. 127. バンヴェニストの引用は以下から。Émile Benveniste, “Sémiologie de la langue” (1969), in *Problèmes de linguistique générale*, 2 (Paris: Gallimard, 1974), p. 66.

3) Agamben, *Quel che resta di Auschwitz*, p. 128.

4) Agamben, “Archeologia di un'archeologia,” in Enzo Melandri, *La linea e il circolo: Studio logico-filosofico sull'analogia* (Macerata: Quodlibet, 2004), p. xxvi.

る（なお、言表行為論は、<sup>ディスクール</sup>言説／<sup>イストワール</sup>物語の区別によって特徴づけられる時制論にも関わるので、時制論もここに含めてよいが、アガンベンにおいてはバンヴェニストの時制論そのものの参照はあまり前景化しない。関連があってもおかしくない著作の最たるものといえば『インファンティアと歴史』（1978年）だが、そこにも時制論はそれ自体としては登場しない）。

言表行為論・代名詞論の内実をごく雑駁にまとめれば、「一人称は言表行為において主体を当の主語として成立させる（そして、そこで相手が二人称として成立する）のであって、その逆ではない。一人称・二人称はセマンティックの次元にのみ、それも言表行為自体との関わりにおいてしか参照対象をもたない。この意味で一人称・二人称は特殊である。三人称はこれとはまったく異なる」とでもなるだろう。

その議論は『インファンティアと歴史』ではじめて参照される。アガンベンは同名の論文「インファンティアと歴史」で、バンヴェニストの「<sup>ランガー・ジュ</sup>言語活動における主体性について」(1958年)を引きながら次のように語っている。

バンヴェニストの研究「代名詞の本性」および「<sup>ランガー・ジュ</sup>言語活動における主体性について」は「……」、人間が主体として自らを構成するのは言語活動において、言語活動によってであるということを示している。主体性とは、一つのego [私]として自らを措定することができるという発話者の能力以外ではなく、それは各人が自分自身であると感じる黙した感情によっても、ego [私]の何らかのいわく言いがたい心的経験への回付によっても定義づけることはできず、ただ、ありうべきあらゆる経験に対して言語上の自我 [一人称] がもつ超越性によってのみ定義づけることができる。「主体性なるものは、現象学において措定されるにせよ心理学において措定されるにせよ、<sup>ランガー・ジュ</sup>言語活動の一つの根本的特性 [としての一人称] が存在のなかに出現したもの以外ではない。「ego [私]」と<sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup>言う者が「ego [私]」なのである。ここに主体性の基礎が見いだされるのであって、その主体性は、「人称」の言語上のありように

よって規定される [……]。<sup>ランガージュ</sup>言語活動は、個々の発話者に対して、自らを私として指し示すことで言語全体を我がものとする<sup>ランク</sup>ことを可能にするように組織される<sup>5)</sup>。

さらに、「<sup>ランガージュ</sup>言語活動における主体性について」から以下の長い引用がなされ、問題の所在が明確化される。

木 [という単語] の個々の使用のすべてが逢着する「木」という概念があるというのと同じ意味では、あらゆる発話者の口からあらゆる瞬間に言表されるあらゆる私<sup>ランク</sup>を包括する「私」という概念があるわけではない。つまり、「私」はいかなる語彙的実体をも名指していない。では、私<sup>ランク</sup>は個別の個人を参照対象としている、と言えるだろうか？ 仮にそうだとすると、<sup>ランガージュ</sup>言語活動においては永続的な矛盾が、そして実践においてはアナーキーが認められるということになってしまう。同じ辞項が、どんな個人をも無差別に参照対象とし、同時に当の個人をその個別性において同定もする、などということがどのようにすれば可能だということか？ ここにあるのは「人称代名詞」という一群の単語で、これらは<sup>ランガージュ</sup>言語活動の他のあらゆる記号のありようから逃れ出ている。いったい、私<sup>ランク</sup>は何を参照対象としているのか？ 何か非常に特異なものを、もっぱら言語上のものをである。私<sup>ランク</sup>は、それが発話される個々の<sup>ディスクール</sup>言説行為を参照しており、その<sup>ディスクール</sup>言説行為の発話者を指し示している。それは、<sup>ディスクール</sup>言説審級 [……] においてのみ同定される辞項であり [……] それによって回付される先の<sup>ディスクール</sup>現実とは言説の現実である<sup>6)</sup>。

- 
- 5) Agamben, *Infanzia e storia: Distruzione dell'esperienza e origine della storia* (Torino: Einaudi, 1978 [2001]), pp. 42–43. 引用は (アガンベンは箇所を明示していないが) 以下から。Benveniste, “De la subjectivité dans le langage” (1958), in *Problèmes de linguistique générale* (Paris: Gallimard, 1966), pp. 260, 262.
- 6) Agamben, *Infanzia e storia*, pp. 43–44. 引用は (アガンベンはやはり箇所を明示していないが) 以下から。Benveniste, “De la subjectivité dans le langage,”

「インファンティアと歴史」の別の箇所（セミオティック／セマンティックの推移不可能性に関して前稿で参照した箇所の直後でもある）には、「ソシュールが「いわゆる「言説についての覚え書き」で」さっと軽く触れた問題が、バンヴェニストによって複雑さをまるごとふまえて分節化された。また、その中心的な重要性を認識したことがバンヴェニストに、言語活動ランガージュの豊かな新章の数々の基礎を打ち立てることを可能にさせた（私たちの念頭にあるのはたとえば言表行為論である）[……]<sup>7)</sup>」とも書かれている。これは、セミオティック／セマンティックの根本的な違いが截然と示されてはじめて（つまりはセマンティックの次元がきちんと指定されてはじめて）、言説分析が（とりわけ「私」の出現する言表行為の分析が）十全なしかたで可能になる、というほどの意味だろう。

『インファンティアと歴史』の2年後、「自我、目、声」（1980年）が発表される。ポール・ヴァレリーにおける「自我（私）」を論ずるという大枠をもったテキストだが、そのなかでアガンベンが、ヴァレリーの指摘がいわばバンヴェニストの議論に先行している（ないし、バンヴェニストの議論がヴァレリーの指摘を裏書きしている）という事実を示している。

[……] 代名詞に関する省察のはじめからヴァレリーはすでに明晰に、その何年も後になってバンヴェニストが「代名詞の本性」や「言語活動ランガージュにおける主体性について」といった研究で定着することになるあの性格を指摘していた。その性格とはすなわち、主体が純粋に言語的な現実であるということ、また主体がもつばら言説ディスクールの審級との関係において定義されるということである<sup>8)</sup>。

続けて、「いったい、私は何を参照対象としているのか？」から「[……] 回

---

pp. 261–262.

7) Agamben, *Infanzia e storia*, p. 54.

8) Agamben, “L’io, l’occhio, la voce” (1980), in *La potenza del pensiero: Saggi e conferenze* (Vicenza: Neri Pozza, 2005), p. 100.

付される先の現実とは言説ディスクールの現実である」までの、すでになされたとおりの引用がそのまま繰り返されている<sup>9)</sup>。

次は、さらにその2年後の『言語活動と死』(1982年)である。導入される問題設定はまったく同じである。

現代言語学は、代名詞を「言表行為の指示子」(バンヴェニスト)ないしシフター(ヤーコブソン)のなかに分類している。バンヴェニストは、「代名詞の本性」や「言表行為の形式的装置」といった研究において、代名詞(「ここ」「いま」「今日」「明日」などといった他の言表行為の指示子のそばにある)の本質的性格を、それらが言説ディスクールへの回付をおこなうということとして同定している。じつのところ、この一群の辞項に客観的な参照対象を見いだすことは不可能であって、それらの意味は、それらの含まれる言説ディスクールの審級への参照によってのみ定義される<sup>10)</sup>。

こんどは、引用されるのは「代名詞の本性」だが、文脈はそれほど違わない。

いったい、私わたしやきみあなたが参照対象とする「現実」とはどのようなものか？それはただ「言説ディスクールの現実」という、非常に特異なものである。私は、「発話」からのみ定義づけることができるのであって、名詞的記号のようにこれこれの対象から定義づけるということはできない。私は、「私わたしを含む、現になされている言説ディスクールの審級を言表している人称」を意味する。それは定義上、単一の審級であり、ただその単一性においてのみ有効である。[……]言説ディスクールの審級を恒常的かつ必然的に参照するというこのことが、私わたし／きみあなたに一連の「指示子」を結びつける特徴を構成している。

9) 以下を参照。Agamben, “L’io, l’occhio, la voce,” p. 100. 引用は、すでに示したとおり、以下から。Benveniste, “De la subjectivité dans le langage,” pp. 261–262.

10) Agamben, *Il linguaggio e la morte: Un seminario sul luogo della negatività* (Torino: Einaudi, 1982 [2008]), p. 33.



それらの「指示子」はその形式から、またそのもつ連合能力から、さまざまな部類に属する。あるものは代名詞に、あるものは副詞に、さらにまたあるものは副詞句に属する。[……] これは [……] 人称の指示子を含む言説ディスカールの審級に付随する誇示的な指示子によって対象を同定するということである。[……] ここといまは、私を含む、現になされている言説ディスカールの審級と延長と時間を同じくする、空間的かつ時間的な審級を画定するものである<sup>11)</sup>。

次いで、言表行為の指示子ディスカールが言説の審級を参照するというこのもつ重要性を再確認する引用をおこなった後<sup>12)</sup>、アガンベンは次のようにまとめている。

この観点からすると、代名詞は——そして他の指示子も同じく、語彙的現実に回付する他の言語記号とは異なって——、「空虚な記号」という姿を呈するが、発話者がそれを言説ディスカールの審級において引き受けるやいなや「充溢した」ものとなる。それらの目指すところは、「言語活動ディスカールへと変換」し、言語ラングから言葉パロールへの移行を可能にするというものである<sup>13)</sup>。

ヤーコブソンのシフター論「シフター、動詞のカテゴリーとロシア語の動詞」(1957年)を参照しつつ同様の議論を確認した後、アガンベンはようやく言表行為概念に——バンヴェニストの「言表行為の形式的装置」を引きつつ——言及する。

言説ディスカールの審級へのこの回付によって開かれる意味の圏域を、さらに明確

11) Agamben, *Il linguaggio e la morte*, pp. 33–34. バンヴェニストの引用は以下から。Benveniste, “La nature des pronoms” (1956), in *Problèmes de linguistique générale*, pp. 252–253.

12) 以下を参照。Agamben, *Il linguaggio e la morte*, p. 34. バンヴェニストの引用は以下から。Benveniste, “La nature des pronoms,” pp. 253–254.

13) Agamben, *Il linguaggio e la morte*, p. 34.

化してみよう。バンヴェニストはこれを「言表行為」概念によって定義づけている。彼は「言表行為とはこの、個人的な使用行為によって言語を機能させることである」と書いている。だが、これを単なる言語行為と混同してはならない<sup>14)</sup>。

そして、次の引用が続く。

[……] 言表行為に特有の条件に注意しなければならない。すなわち、私たちの対象となっているのは、これこれの言表を生産する行為自体であって、言表の文言ではない。その行為は、自らのために言語を動員する話者のなす事実である。言語に対して話者のもつ関係が、言表行為の言語的諸性格を規定する<sup>15)</sup>。

というわけで、言語活動がそこにある（生起する）という事実自体が剥き出しになる事態に注目するアガンベンにとって、言表行為論は模範的な議論となる。

つまり、言表行為論の圏域が含んでいるのは、あらゆる言語行為において、そこで言われ意味されているものからは独立して、そこで言われ意味されているものよりも前に、もっぱら言語行為の生起、その審級を参照対象としている当のものである。代名詞その他の言表行為の指示子は、

14) Agamben, *Il linguaggio e la morte*, pp. 35–36. バンヴェニストの引用は以下から。Benveniste, “L’appareil formel de l’énonciation” (1970), in *Problèmes de linguistique générale*, 2, p. 80. なお、引用中の「言語行為」の原語は *atto di parola* (フランス語であれば *acte de parole*) である。これは J・L・オースティンの *speech act* の訳語として流通しているため、「言語行為」としている(以下同様)。ただし、より広く「言葉をなす行為」一般と取るべき文脈も多い。

15) Agamben, *Il linguaggio e la morte*, p. 36. バンヴェニストの引用は以下から。Benveniste, “L’appareil formel de l’énonciation,” p. 80.

現実のこれこれの対象を指し示すよりも前に、まさに、言語活動が生起しているということを指示している。このように、言表行為の指示子は、意味の世界よりもさらに前に、言語活動の生起自体を参照対象とすることを可能にしてくれるのであって、これこれのものが意味を与えられるのはただ生起の内部でしかない<sup>16)</sup>。

その少し先では、時間性が言表行為から出発してのみ成立する（「いま」の成立において言語的実在が優先する）とするバンヴェニストの議論が、やはり肯定的に紹介されている。「時間性が言表行為において、言表行為によって生産されるということは、すでにバンヴェニストが見て取っている。アガンベンは動詞の時制を言表行為の指示子として分類している<sup>17)</sup>」と記した後、以下の長い引用をおこなっている。

時間性は思考の生得的な枠組みだと信ずる人もいるかもしれない。だが現実には、時間性は言表行為において、言表行為によって生産されている。現在というカテゴリーの設置は言表行為に由来するのであって、その現在というカテゴリーから時間カテゴリーが生まれる。現在はまさに時間の源泉である。それは世界への現前だが、その現前を可能にしてくれるのは言表行為だけである。というのも、ここをきちんと省察していただきたいのだが、人間は、世界に言説を挿入することによって「いま」を現実のものとするという以外には、「いま」を生き、「いま」を実際のものにする手段の一つももちあわせていないからである。さまざまな言語における時制システムを分析すれば、現在の中心的位置を示すことができるだろう。形式的現在〔形態上の現在形〕が明らかにするのは、言表行為に内属する現在以外のものではない。この現在は個々の言説生産とともに更新されるのであって、私たちの固有な現前と延長を同じくするこの連続的な現在を出発点として、意識のなかに、「時間」と私

16) Agamben, *Il linguaggio e la morte*, p. 36.

17) Agamben, *Il linguaggio e la morte*, p. 49.

たちの呼ぶ連続性の感情が表現される。連続性と時間性が、言表行為の絶え間ない現在において生み出されるが、その現在は存在自体の現在であって、それが内的参照によって、これから現在になるだろうものともはや現在でなくなったばかりのものあいだに画定される<sup>18)</sup>。

以上で明確化された言表行為論へのアガンベンの関心は、その数年後にもそのまま持続している。前稿で参照した「<sup>エクスペリメントゥム・ヴォキス</sup>声の経験」(セミオティック／セマンティックにも言及している)には以下のようにある。

セミオティックとセマンティックのあいだの乗り越えられない断裂を定式化していたのと同じころ、バンヴェニストは論文「言表行為の形式的装置」を書いてきた。そこで探求されたのは、「私」「きみ」「ここ」「いま」「これ」などといったシフターによって語彙的現実ではなく<sup>ランガー・ジュ</sup>言語活動自体の純粋な生起を参照対象とするという、<sup>ランガー・ジュ</sup>言語活動のもつ能力だった。「私」が指し示すのは実体ではなく、「私」を含む<sup>ディスカール</sup>言説の審級を発話する人称である。同様に、「これ」は「<sup>ディスカール</sup>言説の現在の審級と同時に誇示」の対象でしかありえない。また、「ここ」や「いま」は、「<sup>ディスカール</sup>私を含む、現になされている言説の審級と延長と時間を同じくする、空間的かつ時間的な審級を画定する」<sup>19)</sup>。

## 2. 言表行為、代名詞(「後期」)

この認識が、さらに10年近く後の『アウシュヴィッツの残るもの』でも確認されることになる。

すでに前稿でも指摘したが、『アウシュヴィッツの残るもの』ではセミオ

18) Agamben, *Il linguaggio e la morte*, p. 49. バンヴェニストの引用は以下から。Benveniste, “L’appareil formel de l’énonciation,” pp. 83–84.

19) Agamben, “Experimentum vocis,” in *Che cos’è la filosofia?* (Macerata: Quodlibet, 2016), pp. 39–40.

ティック／セマンティックに関するバンヴェニストの議論が紹介されている。その直後で、言表行為の問題設定が十全な規模で導入される。

他方、あらゆる言語は、個人が言語を我がものとして機能させることを可能にするべく設けられた一連の記号（言語学者たちがシフター、あるいは言表行為の指示子と呼んでいる記号、そのなかでもとくに代名詞「私、きみ、これ」、副詞「ここで、いま」など）を有している。これらすべての記号に共通の性格は、それらが他の単語とは異なり、現実の辞項で定義づけることのできる語彙的意味をもたず、自らの含まれる当の言説の審級への回付によってのみ自らの意味を同定しうる、ということである<sup>20)</sup>。

そして、「いったい、私やきみが参照対象とする「現実」とはどのようなものか？」に始まり「私は、「私を含む、現になされている言説の審級を言表している人称」を意味する」に終わる引用をはさみ、次のように議論は続く。

つまり、言表行為は言表のテキスト〔文言〕をではなく、言表の生起を参照しているのであって、個人が言語を機能させることができるのはただ、言うことにおいて言われている当のことにおいてではなく言うことという出来事自体において自らを同定するかぎりにおいてである。だが、そうだとすると、「言語を我がものとする」とは何を意味するのか？ これらの条件下で、言葉を発することはどのようにして可能なのか<sup>21)</sup>？

この先<sup>22)</sup>、『言語活動と死』におけると同様、言語を発する者がそこに居合わ

20) Agamben, *Quel che resta di Auschwitz*, p. 107.

21) Agamben, *Quel che resta di Auschwitz*, p. 108.

22) バンヴェニストはこの文脈でもう一度引用・言及される。以下を参照。

Agamben, *Quel che resta di Auschwitz*, p. 113. バンヴェニストの「代名詞の本

せないという逆説へと議論が展開していく。アウシュヴィッツ論においては、その者の座は、絶滅収容所の証言者（そしてその極端な形としてのムーゼルマン、もはや語れなくなった者）が占めることになる。

さて、その2年後に出された『残る時間』（2000年）でも、この逆説が、言表行為への「操作時間」の導入という形で提示されている。「[ギョスターヴ・]ギョームは「操作時間」を、時間イメージを実現するために用いる時間」と定義している<sup>23)</sup>。

[……] 言語が自らの生成の操作的時間を参照することができるという考えは、20世紀言語学の最も天才的な創造物の基礎を——そしてそれとともに、その後の複雑さの元となる原則を——すでに含んでいる。その創造物とは、バンヴェニストの言表行為論のことである。言表行為の指示子によって、言語は言語自体の生起を、現勢力にある言説の純然たる審級を参照する。バンヴェニストによれば、言表行為の純然たる現前を参照することができるというこの能力は、私たちの時間表象の起源である、私たちの時間表象の軸たる参照点をなす時間措定と一致する。だが、すべての心的操作が、ギョームの言いかたではすべての「行動状態にある言語活動の思考」が、操作時間を含んでいるものとする、現勢力にある言説の審級を参照することにはしかじかの時間が含まれることになり、時間措定の内にはそれ以降の時間が含まれ、それが言表行為の「純然たる現前」に断裂と遅れを導入することになる。バンヴェニストは言表行為を主体性と意識の基礎自体としているのだから、この隔たりや遅れは構成上、主体の構造に属するということになる。思考がつねに「行動状態にある言語活動の」思考であり、それゆえ必然的にそれ自体

性」から以下が引用されている。Benveniste, “La nature des pronoms,” p. 262. 「話者が「主体」として自らを言表するのは、私が話者を指す言説の審級においてである。だから、主体性の基礎は言語の行使のうちにある」。

23) Agamben, *Il tempo che resta: Un commento alla Lettera ai Romani* (Torino: Bollati Boringhieri, 2000), p. 66.

のうちに操作時間を含みこむものとする以上は、思考は——それがいか  
に速いもの、いかにさっと飛び越すものであろうと——自らと完全に  
一致することはできず、意識それ自体への意識の現前はすでにつねに時間  
の形式をもつことになる。このことはまたとりわけ、時間の思考と時間  
表象とがなぜけっして一致しえないのかも説明してくれる。自らを表現  
する——そして、しかじかの時間イメージが実現される——言葉を形成  
するために、思考は操作時間を必要とするが、その操作時間のほうは、  
思考をいかなるしかたであれ含みこんでいる表象においては表象される  
ことができない<sup>24)</sup>。

これはつまり、言表行為論と操作時間論をふまえれば、(言語上のであれ何  
であれ) 主体は、必然的に、自己変状する主体以外ではありえない、という  
ことである<sup>25)</sup>。

さて、以下では、言表行為論に関わる、アガンベンによるその他の言及を  
まとめておく。

バンヴェニストの言表行為論とほぼ同時代に展開された類似の議論として  
は、J・L・オースティンの<sup>スピーチ・アクト</sup>言語行為論がある。言語行為論のバンヴェニ  
ストによる検討がアガンベンによって何度か参照されている。

最初の参照は『残る時間』においてである。オースティンの  
<sup>パフォーマンス</sup>「行為遂行的」を簡単に説明したうえで、アガンベンは次のように書いてい  
る。

バンヴェニストはオースティンのテーゼに註解を加え、狭義の  
<sup>パフォーマンス</sup>行為遂行的言表を哲学者 [オースティン] が混同していた他の言語的カ  
テゴリ（命令法「ドアを開けろ！」や、門に付いている注意書き「イ  
ヌ」）から区別し、<sup>パフォーマンス</sup>行為遂行的言表は、当の言表を行為として認可しそ  
の効力を保証する付帯状況においてしか価値をもたないと指摘していた。

24) Agamben, *Il tempo che resta*, pp. 66–67.

25) 自己変状については次回に触れる予定である。

「誰でも、公共の広場で「私は総動員令を布告する」と叫ぶことはできる。そのような言明は、必要とされる権威を欠いていることから行為にはなりえず、もはや言葉でしかない。それは無益な喧騒、子どもっぽい言動、狂気の沙汰へと縮減される」。

このようにして大言語学者 [バンヴェニスト] が明らかにしていたのは、行為<sup>パフォーマティヴ</sup>遂行的言表の圏域と法権利の圏域を一つに結びつけている緊密な関係である（この関係は、jus [法権利] と jurare [誓言をおこなう] の語源的な近さによって証される）。法権利は、あらゆる言語活動が行為<sup>パフォーマティヴ</sup>遂行的な価値を引き受けようとする領域として定義づけることができる<sup>26)</sup>。

この後、アガンベンは、バンヴェニストが行為<sup>パフォーマティヴ</sup>遂行的言表の特性として挙げている自己言及性にも触れているが、バンヴェニストの議論を一部修正している。

ここで本質的なのは、あらゆる行為<sup>パフォーマティヴ</sup>遂行的表現のもつ自己言及的性格である。だが、この自己言及性は単に、バンヴェニストが指摘しているような、行為<sup>パフォーマティヴ</sup>遂行的言表がそれ自体が構築すべき現実へと回付されるかぎりにおいて自らを参照対象とする、というところに尽きるものではない<sup>27)</sup>。

この議論が、「誓言の考古学」という副題をもつ『言語活動の秘蹟』（2008年）でふたたび取りあげられている。

26) Agamben, *Il tempo che resta*, pp. 122–123. バンヴェニストからの引用は以下。Benveniste, “La philosophie analytique et le langage” (1963), in *Problèmes de linguistique générale*, p. 273. なお、バンヴェニストの引用のうち、「行為にはなりえず、もはや言葉でしかない」とあるのは、既述のとおり言語行為<sup>スピーチ・アクト</sup>のフランス語訳が acte de parole で、バンヴェニストの挙げているような不運な事例では「言葉」(parole) ではあっても「行為」(acte) ではなくなる、という地口。

27) Agamben, *Il tempo che resta*, p. 123.



[……]「私は誓う」は言語行為<sup>スピーチ・アクト</sup>の完全なパラダイムであって、バンヴェニストが行為遂行的言表論<sup>パフォーマンス</sup>でこれにそのままの形で言及しながら、『語彙論』の誓言に関する章でその特有の本性をまったく考慮に入っていないのは特異なことである。まさに、ここまで〔『言語活動の秘蹟』で〕復元しようとしてきた誓言のありようこそが、じつのところ、行為遂行的言表論<sup>パフォーマンス</sup>を新たな光のもとで理解することを可能にしてくれる。誓言におけるように言語行為は存在を真理化する、という意味で、行為遂行的言表<sup>パフォーマンス</sup>は、言語において、言葉とものの結びつき（というより、むしろ、構造と同時に生ずるということ）が意味的・外示的なタイプのではなく、行為遂行的なタイプの結びつきであるような段階の残滓を表象している。私たちの見てきたとおり、それは呪術的・宗教的な段階ではなく、意味と外示のあの区別に先立つ（ないしそれと同時に生ずる）構造であって、それはもしかすると、私たちがそう信ずるのに慣れているような、人間言語の原初のかつ永遠的な性格なのではなく、歴史的な産物なのかもしれない（そのようなものである以上、これまでつねに存在してきたわけではなく、またある日、存在することをやめるかもしれない）。

[……] ここで本質的なのは、行為遂行的表現<sup>パフォーマンス</sup>のもつ自己言及的性格である。この自己言及性は単に、バンヴェニストが指摘しているような、行為遂行的言表<sup>パフォーマンス</sup>がそれ自体が構築すべき現実へと回付されるかぎりにおいて自らを参照対象とする、というところに尽きるものではない<sup>28)</sup>。

『創造とアナーキー』（2017年）では、命令法に関して、バンヴェニストのオースティン批判が参照されている。言語学者は命令法の意味をうまく記述できていないとしたうえで、アントワヌ・メイエとバンヴェニストが有益な所見を述べていると指摘している。メイエの議論を紹介した後、アガンベンは次のように続けている。

28) Agamben, *Il sacramento del linguaggio: Archeologia del giuramento* (*Homo sacer*; 2-3) (Roma-Bari: Laterza, 2008), pp. 74–75.

バンヴェニストは、オースティンが命令を行為<sup>パフォーマティブ</sup>の遂行的表現と見なすという譲歩をしているのを批判している論文で「……」、命令法は「外示的ではなく、これこれの内容を交流することを目指していない。それは語用論的なものとして特徴づけられ、聞き手に働きかけること、これこれの振る舞いをするように聞き手に厳命することを目指している」。それは本来的な意味では動詞の時制ではなく、むしろ「特有の語調とともに命令的形式として用いられる裸の意味素」である<sup>29)</sup>。

以上のもろもろを整理するようにして、アガンベンは『仕事部屋の自画像』(2017年)でのバンヴェニストをめぐる回想を言表行為論の重要性の指摘で閉じている。

[……] 70年代初頭にはじめて読んで以来、著作が私にずっと付き添い、私から離れたことの一度もない言語学者、エミール・バンヴェニスト [……]。22歳でシュルレアリストたちと交差し、25歳で<sup>エコール・プラティック・デ・オート・ゼチュード</sup>高等研究実習院でアントワヌ・メイエの跡を継いだこの早熟きわまりない天才において比較文法は頂点に達したが、その尾根では言語科学と歴史研究というカテゴリーがぐらぐらと揺れ、哲学へと流れこむように思われた。彼にとっては、言語は単に記号のシステム、ものに貼りつけるラベルの一覧ではなかった。言語はつねに、むしろ、そのつど何かを誰かに言い告げる言葉の生きた行使だった(彼は存在しない単語を発明することをほとんど余儀なくされ、コレージュ・ド・フランス講義のメモ書きに、「言語活動は単に *signalique* [印号的]ではなく、*nuntial* [言為的]である」と書いていた)。彼の人生最後の数年に練り上げられたあの並外れた言表行為論ほど、言葉のこの「言為性」を証しているものもない。その理論においては、「私」「ここ」「いま」と言う

29) Agamben, *Creazione e anarchia: L'opera nell'età della religione capitalista* (Vicenza: Neri Pozza, 2017), pp. 101–102. バンヴェニストの引用は以下から。Benveniste, “La philosophie analytique et le langage,” p. 274.

発話者は言表の文言をではなく、告知行為自体を参照し、ほとんど、それを口にする声を参照している。それはすなわち「天使」、何かを言いつつ、何よりもまず自らを告げる使者である<sup>30)</sup>。

### 3. 一般言語学（その他）

一般言語学関連のバンヴェニストによる考察のうち、前回扱ったものと上で扱ったものを除いた残り（そのうち、語彙論が前景化していないもの）のアガンベンによる参照を以下に羅列しておく。ただし、中動態については紙幅を要するので、例外的に次回に扱うことにする。

まずは、名詞文論である。バンヴェニストの論文「名詞文」（1950年）における議論が『残る時間』で引かれている。名詞文というのは、要するにコプラを欠いた文（「人生は夢である」ではなくて「人生は夢」というような）である。

[……] 現代の言語学——とくにメイエとバンヴェニスト——の仕事はまさに、名詞文を、コプラが言外に置かれている、ないしコプラがゼロ度で現前している文と見なす通例の解釈が単に偽であることを示すというところに存した。「名詞文と *esti* 文は同じようには言明せず、同じ帯域には属さない。名詞文は言説ディスクールのもの、*esti* 文は語りのものである。一方は絶対を指定する。他方は一つの状況を叙述する」<sup>31)</sup>。

30) Agamben, *Autoritratto nello studio* (Milano: Nottetempo, 2017), p. 153. バンヴェニストの引用（若干省略的）は、明示されていないが、以下から（なお、「印号的」「言為的」は今回、試みに充てた訳語にすぎない）。Benveniste, *Dernières leçons: Collège de France (1968–1969)*, ed. Jean-Claude Coquet et al. (Paris: Gallimard-Seuil, 2012), p. 51.

31) Agamben, *Il tempo che resta*, p. 119. バンヴェニストからの引用は以下。Benveniste, “La phrase nominale” (1950), in *Problèmes de linguistique générale*, p. 165.

『身体の使用』(2014年)でも、これに関連した議論が「言語的機能における「être」と「avoir」」(1960年)から引かれている。アガンベンは、同一の動詞が存在動詞とコプラとして使われることについて触れた後、バンヴェニストから次の一節を引く。

「存在する、そこに現にある」という動詞観念と「コプラ」機能のあいだには、いかなる本性上の関係も必然的關係もない、ということをしちんと見ておくことが肝要である。どのようにして動詞「être」が欠けたり省略されたりするということがありうるのか、と問うてはならない。それは逆向きの理屈である。反対に、本当の問いは次のようなものとなる。動詞「être」は、平叙的言表においてしかじかの論理的關係に動詞的表現と語彙の一貫性とを与えつつ、どのようにして存在しているのか<sup>32)</sup> ?

この「言語的機能における「être」と「avoir」」は、同じ『身体の使用』において、また別の文脈でも参照される(そのうえで、議論はアリストテレス形而上学を巻きこんで、hexis/habitus [もちよう]に関する省察として展開されていく)。

模範的な研究において、バンヴェニストはインド・ヨーロッパ諸言語における「être」[である]と「avoir」[をもつ]の言語的機能と両者の関係を定義づけようとした。両者はともに一つの状態を指し示す動詞である。「être」[である]は存在者の状態、何かである当のものの状態である。avoir [をもつ] はもつ者の状態、何かが属する当の者の状態である。違いはこのように現れる。être [である] は、それによって結びつけら

32) Agamben, *L'uso dei corpi (Homo sacer, 4-2)* (Vicenza: Neri Pozza, 2014), p. 158. バンヴェニストからの引用は以下。Benveniste, “‘Être’ et ‘avoir’ dans leurs fonctions linguistiques” (1960), in *Problèmes de linguistique générale*, p. 189.

れる二つの辞項のあいだに、内属する同一性関係を打ち立てる。それは、実体を共にする状態である。それに対して、avoir [をもつ] によって結びつけられる二つの辞項は、判明に分かたれた状態にとどまる。その二つの辞項のあいだの関係は外在的であり、関与的と定義づけられる」。さらに、バンヴェニストによれば、avoir [をもつ] は「être à」[のものである] が転倒したものにすぎない。habeo aliquid「私はこれこれをもっている」は、mihi est aliquid「これこれは私のものである、私に属している」から派生した二次的な異体にすぎない<sup>33)</sup>。

人間の言語の本質的特性を探る「動物の交流と人間の言語活動」(1952年)も、一度だけ参照されている。『言語活動の秘蹟』に以下のようにある(続けて、アガンベンは、そうではなく、人間は自らの言語を自らに特有の潜勢力とし、自らの本性を言語活動のなかに置くという点で他の動物と異なっている、と述べてはいる)。

言語学者たちはしばしば、人間の言語活動と動物の言語活動のあいだの違いを定義づけようとしてきた。バンヴェニストはこの意味で、内容が定義されるのは一度きりという固定的な信号コードであるハチの言語活動を、人間の言語に対置している。後者は形態素や音素において分析され、それらの組み合わせによって潜在的には無限の交流の潜勢性が可能になっている<sup>34)</sup>。

一般言語学関連では、『身体の使用』で、有名な *rhythmos* 論も(これは語彙論に分類してもよいのかもしれないが)参照されている。議論は次いで、

33) Agamben, *L'uso dei corpi*, pp. 90–91. バンヴェニストからの引用は以下。

Benveniste, “‘Être’ et ‘avoir’ dans leurs fonctions linguistiques,” p. 198.

34) Agamben, *Il sacramento del linguaggio*, p. 93. バンヴェニストは以下が参照されている。Benveniste, “Communication animale et langage humain” (1952), in *Problèmes de linguistique générale*, p. 62.

アガンベンの展開する様態的存在論へと接続されていく。

バンヴェニストは、「リズム」(rhythmos) がソクラテス以前の哲学の専門用語であって、それが固定性における形式ではなく（それには、ギリシア人は schēma という辞項のほうを好んで使っている）、動いている、動的・流動的なものによって形式が引き受けられている瞬間における当の形式を指すものであることを示した<sup>35)</sup>。

(以下、別稿に続く)

---

35) Agamben, *L'uso dei corpi*, p. 224. バンヴェニストは以下が参照されている。Benveniste, “La notion de ‘rythme’ dans son expression linguistique” (1951), in *Problèmes de linguistique générale*, p. 333. 『身体の使用』では「p. 33」と誤記されている。